

旅日記  
癸午  
全

特別  
~10  
4476





蘇日記獨樂全



蘇名

春服舍

早丸



江川右丞及坊門版

河代官所

伴夏國所新坊

善信龜印

未廿二景




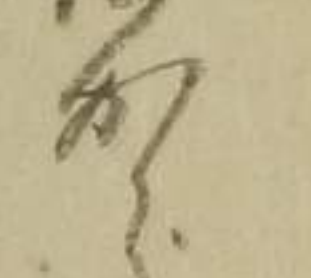

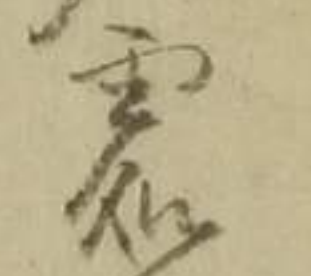
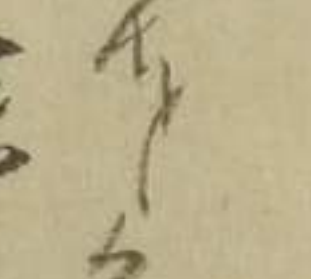
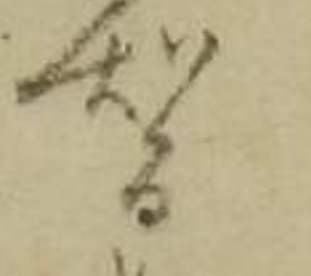

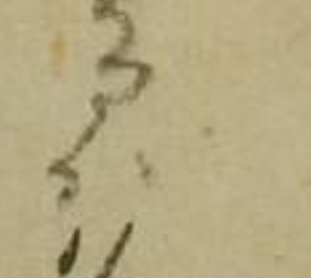
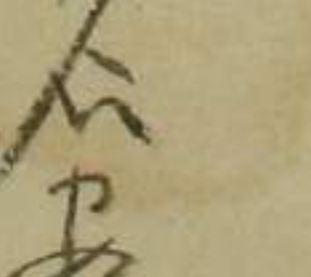

10  
4476




持へ10  
4476

10  
4476  
巻

昭和九年  
十月八日  
購求

此の書は... 余の元... 著る... 深... 著る...  
 子九... 著る... 著る... 著る... 著る... 著る...  
 の... 著る... 著る... 著る... 著る... 著る...  
 著る... 著る... 著る... 著る... 著る... 著る...

交々々々々々々々  
 著る  






何作名共久日長福々々々々々  
何人連れ共々々々々々々々々々  
何々々々々々々々々々々々々々々々  
何々々々々々々々々々々々々々々々  
何々々々々々々々々々々々々々々々





新編書



系宮さまの所御所御  
相承の御経福地増の御  
御意あり地々々々々々々々々々  
天照神の御意あり

宇治橋の御意あり  
人波をふけりおの先お細と結付侍  
奉御多あり  
天照神に奉承あり  
波を御意あり宇治橋の御



比川鈴麻川幸しく世川子流をまひ  
内宮様系信いゆし天下町家出りせ  
世道し商人見せふ娘子供あ名物山田  
細之を山采めふさいしあそく海邊事つ  
並あり吏が浅間山七指あ丁登り  
毒う毒をこまじく風につけあふ

今を感の毒の使り

聲をうりしと毒の使ぬ式

うきみの中ふあちうくし

源名西社茶豆腐な中合い

とう母やいらつてもはるたの考

世に二見浦目下に入申の誠の業を言友







物寄の少将さふあのおもひをいふ  
平衣

物寄の少将さふあのおもひをいふ

少将のさむけをいふてめをいふ

全

あのおもひをいふてめをいふ

あのおもひをいふてめをいふ





其返書也

おし強く君にゆきくら甲斐文りて

娘しき増々母の文たらん

そ夜と四師母も酒を呑ゆりき母し

候お休之十三日天幸四師松尾及出之あは

別しきも厚の君殿や四師の世話

宮川裁裁柿田宿露屋にき中食いし

露屋にき運入し客ハ電燈師

今も松坂城しきわらん

松坂宿しきしハ焚情の具世も出さしき

焚情ハ夜毎も客をきり夜の

宿にきし世をほろのりし



六人五被

柑をもさしてきくや泊る鳥

月中宿角屋法書方泊り

十の夜つ月宿に泊るも

丸くはあひる家へ角屋へ

十四日雨月本出之

妻も今に後と六あうとぞ

一分も出さぬあいのせうとぞ

久石の痛と誠しあうとぞ

雨降くまもさ返らぬもせま

まをさぬとて雲の旅人

ゆきも雪うとれ旅や猫の意



字はばし 残まゝに 今も 旧





Vertical Japanese text on the left page, including a title and several lines of handwritten characters.

Vertical Japanese text on a small white paper slip pasted onto the left page.





三朝多病もお穢長控宿の中食波  
以教に事海老と喰ふ

雨降るも道も長控宿

よきしゆく海海老の舟

平松病を今も時田小陸多く啼き

姉も泣きたる事を笑ふは時陸

山田宿海老車平方泊り共生碎の人

来り亭主と何れも痛しは生碎の

相方

亭主と共の生碎の人

中へゆく生碎の人

十日天気山田也之生碎の上陸は新渡



お敵去子系通し大向系宿言中食いし  
まがわさき宿永渡しお越かも宿を麦  
畑と見せく

春の日かき能化麦の穂を母とみ  
ゆるりゆるりほらみわたり

お良大佛前いこくえや孫三宿言論り

りこい八在浦おも洋舟上在にこく庭り

第心こん事ありり酒を吞指の得る亭

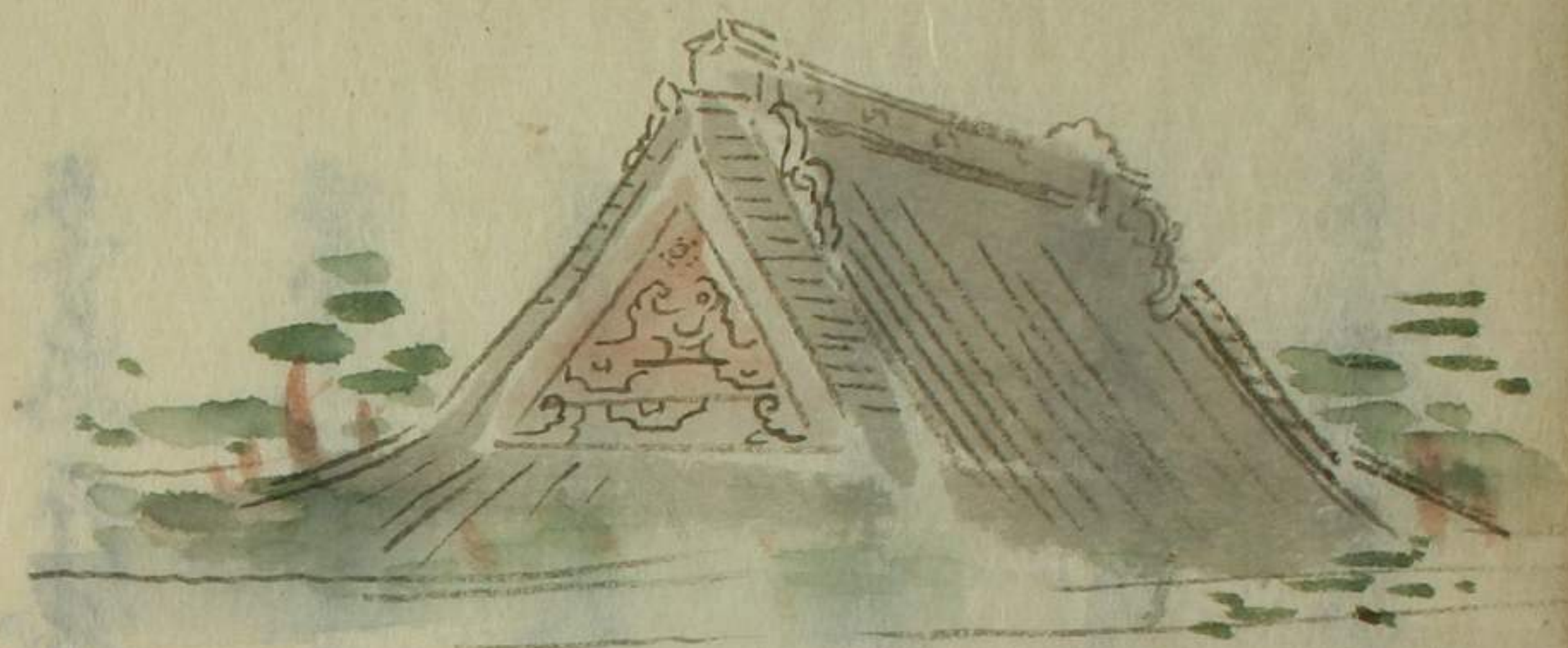
まきあり大和七五茶の影を波し茶明日

お良見物の案内おれおろくお佳山三

輪大向神の心を波しりこい

酒吞ハあはれハより種をこし樂く







しらゆの三田のふしもあまひ

そ夜ゆ郷の事と爰に〜

古郷や旅の抱ゆ爰に〜

十六日天氣多良大佛殿新法浄一表以

つる〜是と俗に景清山と〜悪七三清

一七日ふもり〜い子出つ〜浄堂系清政

け山堂ハ孝謙天皇造之〜是世山堂前有

三代將軍様山造之洞院龍河の丈二月

堂三月堂四月堂系清の丈菅堂

相腰魁石 系 三条古殿石山宮河の旧決

爰に名何の爰が子向山別道系丈

三山山林麻系麻の巻系角細之



し名物をいふ可き草里を云く

厚りの減り去りてふかき草

くたつと産た雲——の草

三笠山と海は六席海した病をいふ

春の草三笠の山と海は六

日影たえ申世の小男麻

三笠山の世の草麻の

さやの草世の草の里人

耳の草近く草申の草と

里に草の草の山風

文が春日大社神の社草の石燈籠洞

燈籠草の草七色の草何の草の草





鹿

鹿の姿

鹿の角

鹿の尾

鹿の蹄

鹿の毛





庭の中あり葉ハ七色に染りけり  
園の院に在り甚多  
○飛柱此洋を丈が河のみ  
集りけり六姉眷山石ふづり  
世れちいさき  
泊澄河りけ澄を十三層と  
ふ言ふつに  
七の斗り控く故右十三層  
いさなり  
娘し何やと尋姉眷ふ河のみ

初りのもほげぬ十三層の

精沃の池系りゆれ世れが  
三堂山と承りて  
麻の形をと思へ

子とほまた麻もかきくた

あまね月のおとあゆみ

は新ふ八重橋を是とあ良り  
ぬの八重橋



とらふらふら

今もあふあふの流りハ主候

ふらふらとハ〜めくぞら

衣掛柳とらふり足ハ采女姫世柳也衣

をうけ池あをを流るとはあハ

子代々白の柳に衣をうけ垂り

海に落ち池の水うけ

右様海の池に輕射海山もあ世恨に采

女姫の四宮河り

あ〜来〜毎に集る池の泉

夫々七堂伽藍〜系りしは西園の礼奈南系

堂河り但八角の堂々系今堂〜系りしは







弘法大師花向の雲と云ふ所なり玉大サ早

る四方の如重の塔を夫が地家堂と云ふ

は六面尊八十二面觀音と右京法華所共

余名不多——と云ふも筆紙にそしめし

又が病いと云ふ氣の病を乞夫が大坂に

ありしに厄に逢ふ追分なる中食波し時

惟ふ所ありし是法く上忌を脱し脊原

くらくりし峰の如しは花の如きを思ふ

梅を六風の如くは風あり

是乃の如くも永くありの如

くらくりし峰の如くは流轉にしは六の如

一服一洗し看板を放世家運入るを



吾夫が松平に和通了哉——  
玉造<sup>出</sup>——

くさのうら峠松平打哉——

洲<sup>出</sup>玉造<sup>出</sup>——

世に華屋と思ひ——家小宿引大橋  
右に月年改り人々あはれりあ

あはれり南洲に山泊へ何屋に山成といふ  
付我々の道好大和屋津之序方お源  
津中の得去り候あはれ石大和屋と名者  
赤いおおれい中と云く其家お運又り  
是又人々私成大和屋津之序方の  
右代に山山あはれ中といふく其不之







系之及是ハ能ク人亦逐一ノ事ヲ務メ  
悦ビ道ハ亦所ヲ系ルル也ハ右人ナリハ吾等  
ハ金比羅ハ以テ私ニ成ルルノ事ヲ我々  
重ク死シ急シク申シテハ右ノ事ナリ今  
只私方ハ主人ノ病ヲ治スル事ヲ取テ私  
主人方大和屋仲助トシテ申シテハ  
付ル係我々ハ其ノ事ハ月申シテ大和屋  
氏代清吉トシテ申シテハ物事ハ申シテ  
取ル事ナリト申シテハ右ノ事ナリ  
昨日申部ト申シテハ右ノ事ナリ  
亦宜ク申部ト申シテハ右ノ事ナリ  
右ノ事ナリ大和屋仲助トシテハ



風呂も色ぬ月重比羅私吉祥丸  
夜大坂道船出帆の道

十七日天氣重九時風和風播員二見渡

入津浦一帝組人々退宿が皆々福言

り

長子日おりし私の人々

二見河うきた福言一にり

湯にうき髪を流さるる時日新町航津

十八日雨重四時九時一息八湯全停意

よ

八島屋の家八何士のしそと

名の照り酒々舟丸丸



あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ





象頭山松尾内河橋前屋幸八文海邊六  
菓子賣の娘多ういりくせーりと今版平  
巻席の子豚氷綿被と信々

今版の味きいあめん席のりり

ゆめあはれしんいもつるふん

十九日と子徳初屋出之象頭山金毘羅大

権現余活波しん洋見し又が舌

通寺余り道洋や坂家にも甚難

活波しん

吾人の通寺と思ひしに

中つる屋のりり

夫が孫谷寺余活波しん洋見し又が舌



あはれ

申すやうな月日と書し別道に

心算より承りて旅をいそぐた

あはれ海客のいそぐた

屏風浦の海客のいそぐた

石た高き屏風浦の娘の

初ら姿の海客のいそぐた

夫が多度津のいそぐた海客のいそぐた

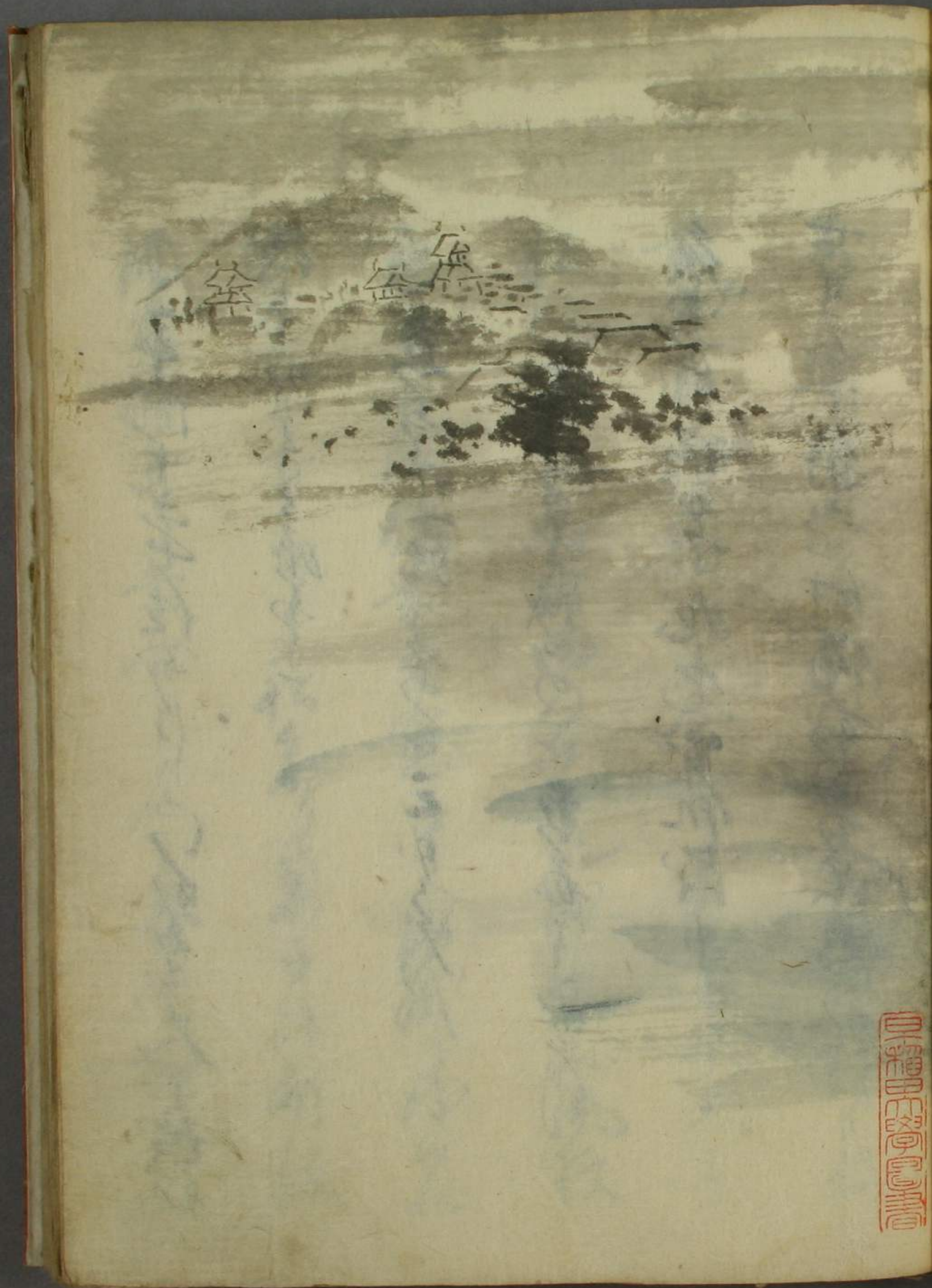
あはれりて舟中のいそぐた

見ぬ描に馬をいそぐた

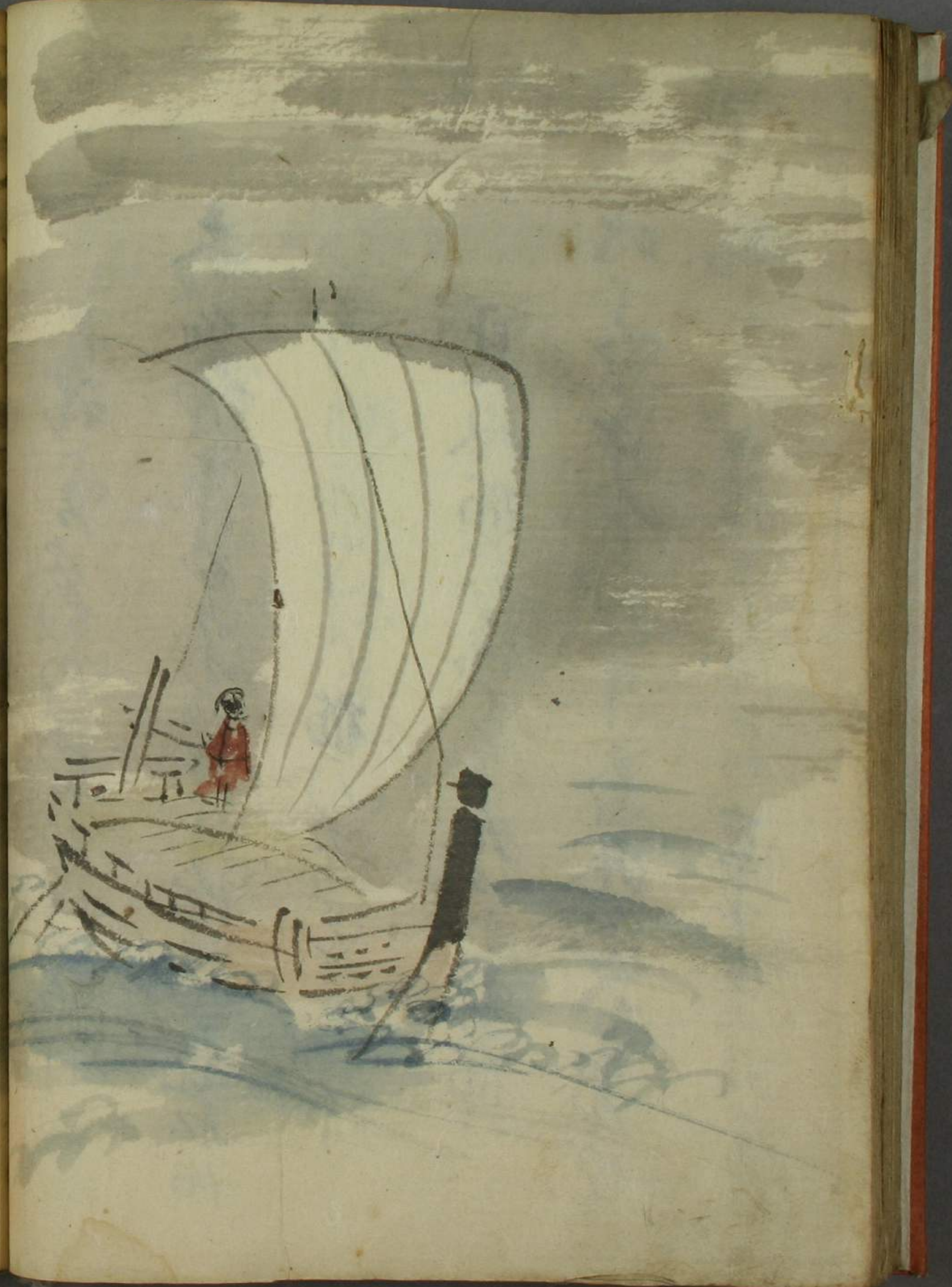
いそぐた中倉のいそぐた

風呂にいそぐた海客のいそぐた





山水册子





去年に十宅位ありしりあや人ふ誠極  
後一かゝるる路あり

あまふ妹う姿をにりり

うらぐ成るのとお毎う

夜四時松中糸丸屯出帆

廿日天氣將六時備前田の只る松浦

あゝ瑜伽山多法海一夫が田の口はく侮

前境の徳利 兼少倉草真田お求ま

船に糸立九つ時田の只る帆海一山風紋

悪く五成侮前中憲沖一沙哉り海山

地方うらうらう松糸う葉子海剛版

酒者持糸う葉合一人々呑食う



浪風の漲くそ 弘のちと久しや

赤名をてしりそりち河はしり

皇九つ時河洲出帆い海し教む時播員赤穂

入庫吉祥丸弘船とく泊る石物横屋と承る

廿日天氣亦穏境候見物御

陸奥の燈り八字わらりまの

さても昔案ふ月日ありり利

御城を為波し 義士の菩提所 善長寺

系り木像宗快波し 系以巻所 系活波山

支那廊前入口の左右に大石氏居宅庭に在

る柳をすする大徳氏庭に在る柳を

なるなる





早とれ

志は此節に是れ一日の節に

物に風を来りしり

空

春徳は身自身をたると原

かいつまみれりしりのあを



血の毒ハ毒世々散々何事も

櫻の毒ハ子孫に及ぶ

片流之末より正條宿丸倉利運方

中食流一末より正條川船流一お城

流之ぬみ水や心はも流流る

身おゆふ根正條の川

娘流中二階河より流更お承末市川

お流一お城お承末雨降正條宿丸

屋在流更流

市川の流の流一お城一お承

まゝお承末

廿二日大雨沖急お承末



痛くある豆湯や妻の籠

吾根の妻と物波一石の室辰とあり又

高砂の松と清く

福清と子孫業ふと松のわが

右を高砂の母はぬるわ

住吉の社もあつた尾との陸もあつた是ハ

天竺の日印の酒の時就寢の夜更が世なり

とろとろのふけ陸のありと方に物ありと片

枚の妻とまふゆり又が別府の松の妻

糸くさ

さふ松の床と尾上の陸なり

別府の松の妻







夫が如吉川も西谷も誠書いけ病中書  
御 大久保君も誠書く

長いけとまき進み海に女河久保也

御 夫たきの六命ありり

明石山下若尾進言 海に髪と居り

何ふも何としていふありり

とけぬあゝ海の河んどら

昔曾て幸ひ石也之海へ浦舞子之辰を過

り

逢ぬ秋を居り其を夜に海に

海への恨のはりる

世に雲の並木とゆゑ林



三味線の為う梅子あそびえいせい

山子も舞あう漢水あらん

一谷敦盛の石碑 新 石物養育と合ふ

石物ハあうが日中一乃台

於ばハあそびの味もはじつ

兵庫生田の社お城の宮大神堂多法

波一丈ハ合お城大坂道好勝

ひき橋大和屋三郎之角り川船

藤三三味線鼓笛古鼓拍子布を大踏

いし寝ておめう〜後

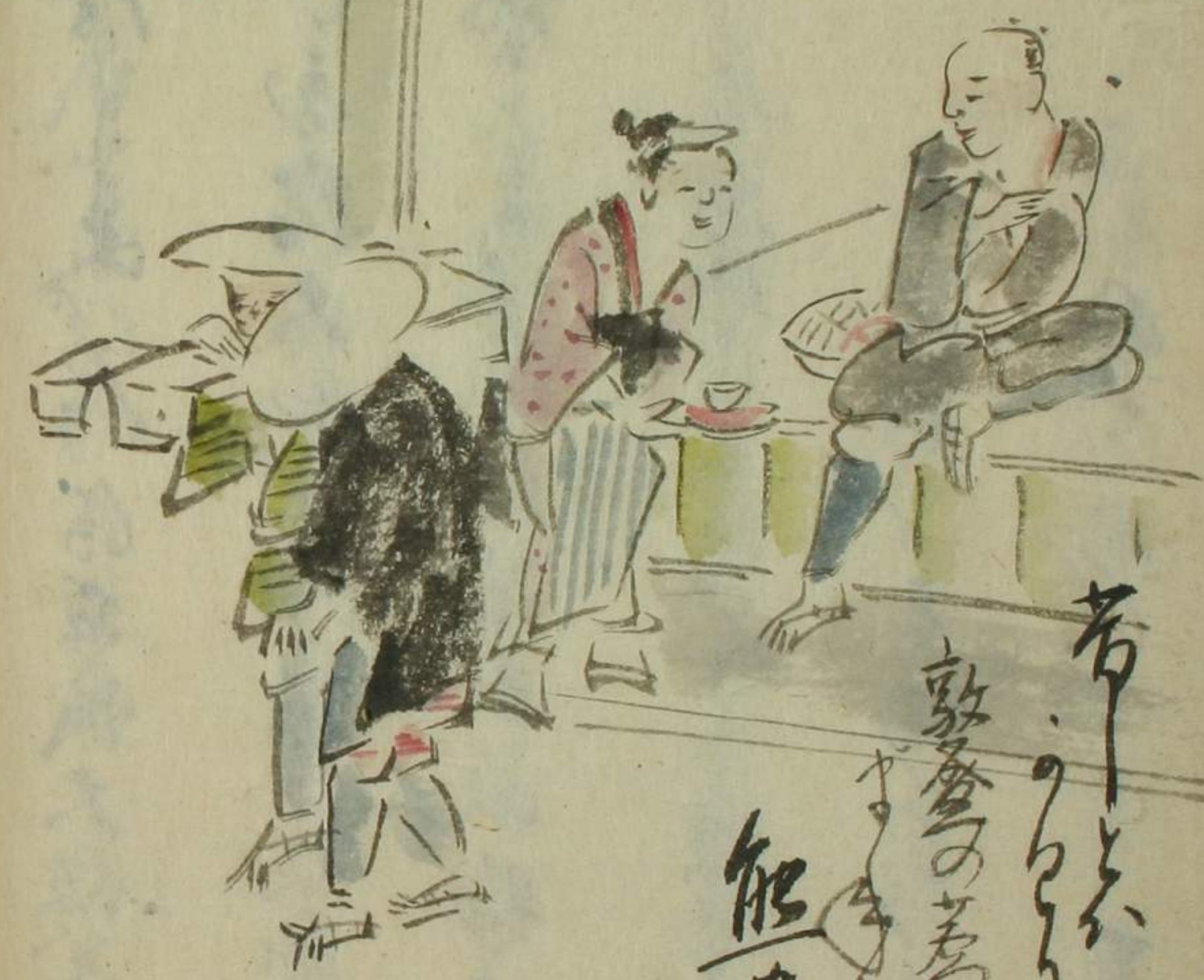
長江船を三味あつ〜みそ初

あ〜あ〜 古郷の妻



敦盛戰場跡ハ三右ヨリ西方境川ヨリ  
 東ノ山麓ナリ兄若狭守經俊ノ塚ハ兵庫ノ北ノ方  
 廣ノ所ニ在リ但馬守經正ノ塚ハ夫ヨリ北ニ  
 甲方ニ在リ徑ハ琵琶ノ方ヲ得テ後人ハ此  
 ありしを以テ琵琶ノ形トシ今ハ琵琶ノ形ノ塚ト  
 号スル也此ノ徑ハ一岩ノ數ト三ノ子ヲ討タシキ

敦盛之墓  
 方四尺其墓石 高サ一丈二尺



昔ノ事  
 敦盛ノ墓ヲ考ヤル  
 能ク之ヲ  
 講人不知







十二日雲西甲形多雲雨し外見為

差信の分お記々宿中帰し〜

入来り客々〜大津宿〜

花の形も賑々あり〜

廿七日雨京路出之大津宿を名爲曉〜

お休まが近江八景見為時〜

名爲之并さの〜

雲津に度々〜

唐崎の松濤田の唐徳信所〜

田々〜

名あ〜近江八景三并さの

〜景々



七景を霞くく三井の渚をり

兼侍宿る中食神一丈が仲仙道守山宿

後名お誠大もるまも漏滅か新虎御をい

馬降くく望りり山の道申ハ

おまもらるるかめくみ宿うふ

武休宿をりり六お宿をり宿宿る女伴

引りり六

孫人を引り女申り出宿るも

月武休宿く客も運入らる

るち川宿中の子を長く是流り嵐中の子り

お殺おりると客の名ふあをくくうあを

家の名と客わくくくくく行のみや





身元

同也

神由也

名可也後也

後也也

都也降也名可也の

平元





乃海に四礼を向ふ

廿八日三氣をち川相出立はつた

言ふの痛大雨を老人通り

傳ふと病びたるを

雨降るく石井踏身と病ひる

人乃病るるをの病

香取に針出摺針出鍼する傷痛を

休酒を春夫不醒と井と通して

まじらばあとおひか香るは

もよおるるを井の相

相取にりて六世に女を患は近江

いふ有りて史が今復冥系を



日廻るはとらふと旅人も

道とては心くく華とあうふ

樽井宿お城

舟をほげしるの渡りたる舟

練とて来と六 舟渡り宿

舟渡宿松屋名清京泊

昔九百兩舟渡宿おとする舟かろと宿お

越か納宿と花屋志ハ方々中舎いほし

二人りのとてぬの船のりか納宿

今そ浮名ものたる毎やわし

産の葉とてくく

旅人もとてとてたらしむるや





卯の  
瓶  
子  
産  
物  
名

卯の  
行



醒  
丹  
名  
物

餅  
小  
鮎

腹  
の  
子  
小  
鮎  
名  
物  
名



庭とあめあ〜〜皆通るりり

物浪病お越太田病ありては又友娘子徳

利とさげ来る。と身〜

災く〜〜姉お袖て何女の病

池利とやあ〜承る物の〜ら

伏見病去屋市造つ方へ泊る

誘人とまの屋の家お泊るらも

お是れあ〜みのあ〜何〜らん

晦日雨伏見病おきみたけ病お

妹と氣みたけの如や友と侍

細久子病お越りては

常陸と〜細〜〜通る〜ら



いともやち中間の宿を誠大久自宿おこし  
宿引をきくさめりし

西川の大人自あふぬ宿中を

うど先あれて通る旅人

弟尾に休はなと波しまた十三夜お誠  
あうしむはく降りぬ御の事あひひて

いぬら

古里とらふきくぬの長孫か

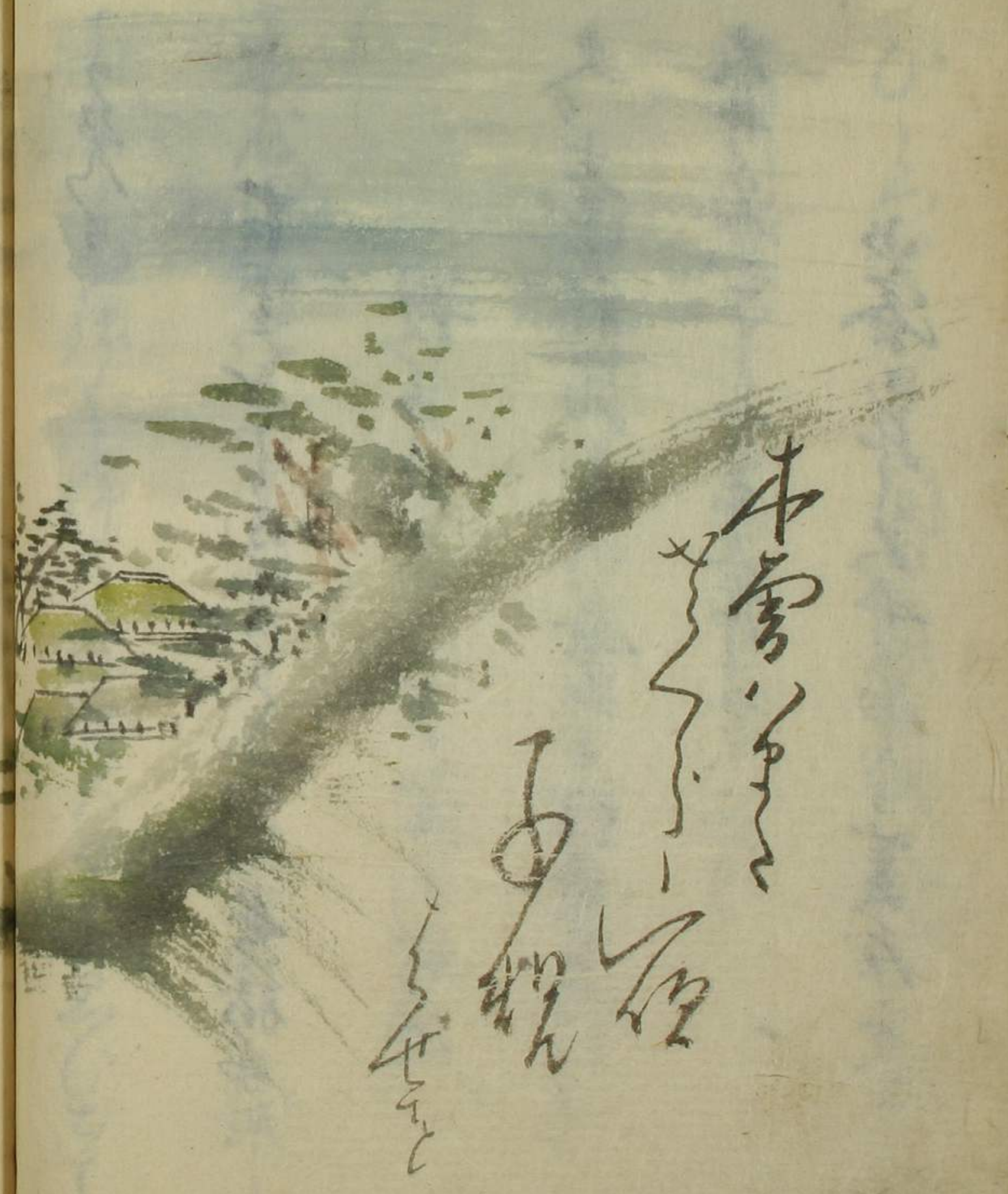
親子あしきく言の道

夫がきく孫宿おくり世あか伊勢道なり

大井宿をいやま九席方泊り

山谷山ゆ大井宿あき養屋か





中書  
子  
...



心——と在愛わつてゐる旅人

風景も愛しぬらうか由緒あつらひすゑんは  
るをそま人も愛さずしゆらう——と見らる

よ——めそある大井宿あり由緒らうと

そ人も愛つて——と見らる

四月朔日三津大井宿出立四音山晴し

景色——と見らる

四音山へ景色のよさを海へ

あつた晴あり 曙の空

更衣と顔あり

作務あり袷着けしみあり

布子の綿も被ふあり



子も此方あり海ぬをたのむる

あはれ川を越津川宿に夫が居合宿に

谷名のつらな居合や長れ臨

十曲津を越海あめ宿に夫が妻親宿の中

食津の流三斗の薪の千束を教買山代

妻親宿山宿に夫があつ海りる妻及るに世

を又か西降せしみの宿を雨降本宿山

水多平波しりきとあて

谷川の流を越津にありき

あつらあせぬるあまの山中

旅人のまをめぐり山流り

野鹿宿に平沢に宿の宿を越津系宿



出夫が之町久保倉傳の遊方（海）

野鹿のよきとどきあふくはて休まらぬ

たふちあふくはてき 人

周長おきこひ信をかーの北右物（海）

と路（海）け出ら娘子（海）給仕にありき

妹（海）の顔（海）を（海）して（海）あふくはてき 一の

海（海）の（海）あふくはてきとどきあふくはてき

二日（海）の（海）あふくはてき之（海）寝覚（海）あふくはてき

右（海）市（海）の（海）計（海）あふくはてき右（海）市（海）の（海）名（海）物（海）を

是（海）を（海）信（海）員（海）新（海）著（海）為（海）あふくはてき

右（海）市（海）の（海）計（海）あふくはてき

海（海）の（海）あふくはてき



中へむらさき花ばの出来たり

娘子、今がやうく福さめ相

あまのり花ばを離るゝいや

と、松宿を本曾機と流り〜

うけ移や別とのまの流は家

福宿を河原新を致〜

暑き日か流るゝ汗をぬくし海の

流るゝ雲と致〜と流るゝ川

宮の梅宿を吉燈を履き通つゝ方々中食波

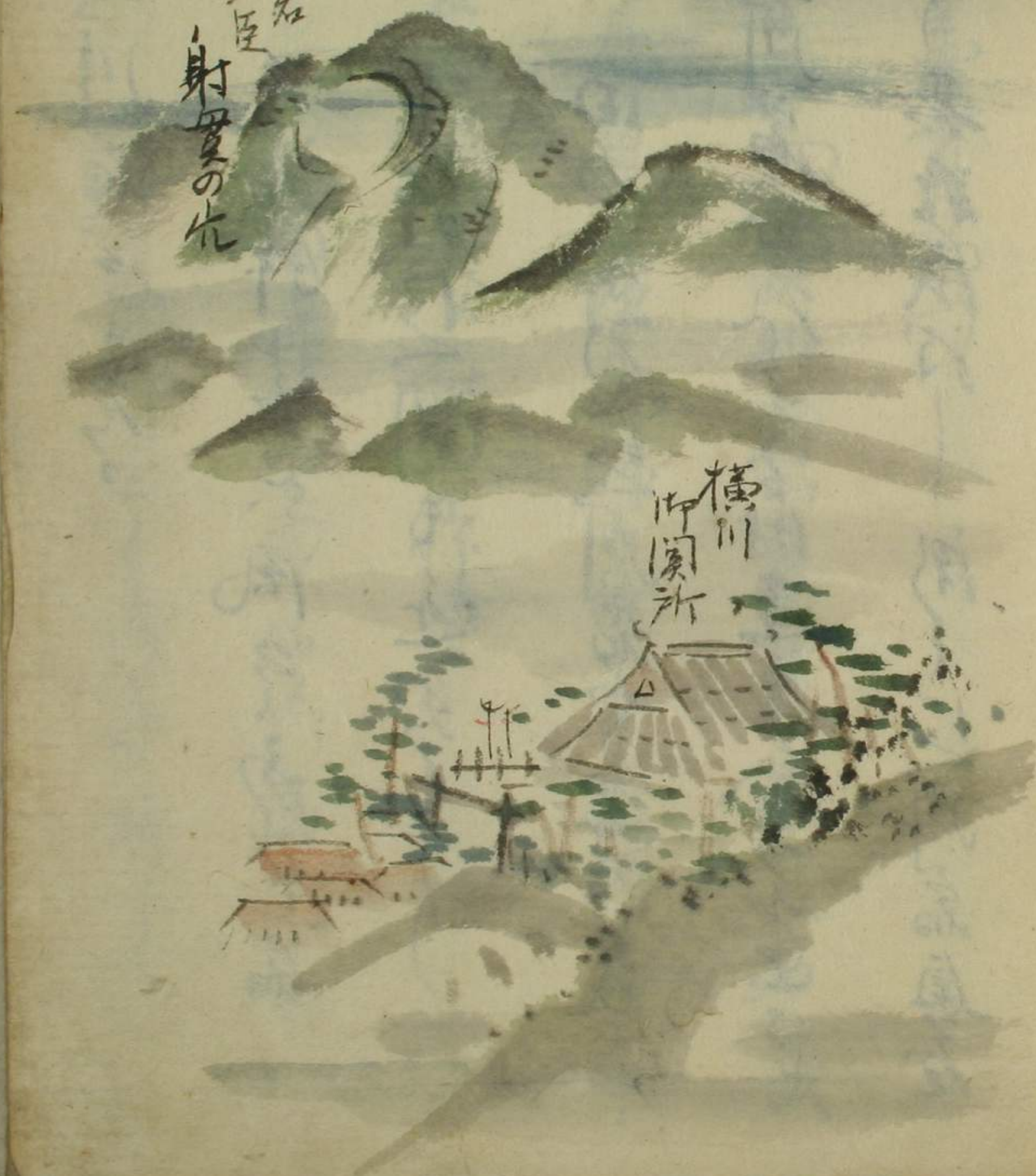
中食のあけの味しはしのやめ

容し〜も〜運入めたる

や、小糸宿を井上井上誠あふ井宿あま



申り  
大臣  
射置の丘

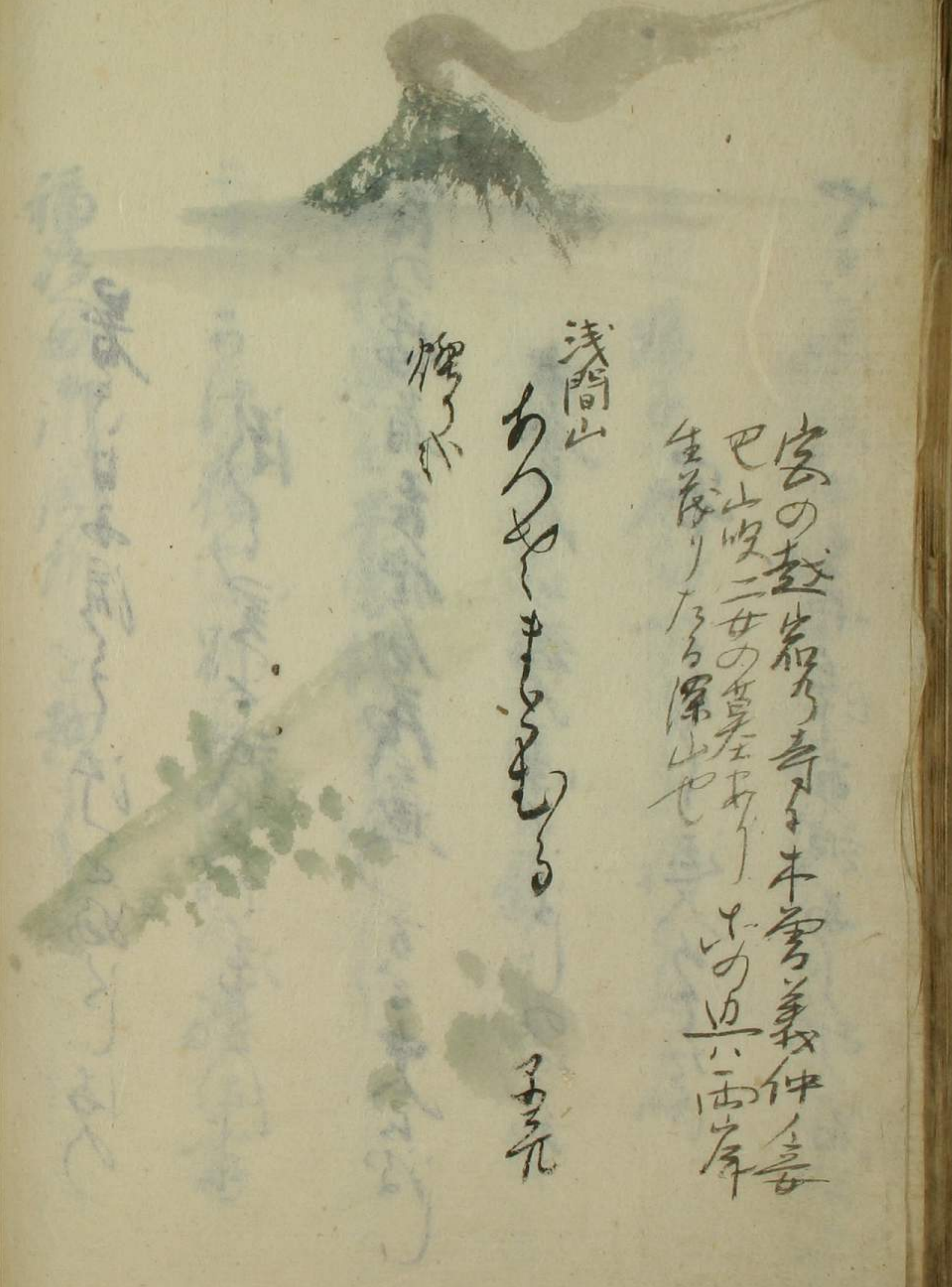


横川  
御園所

浅間山  
ありやま

子元

空の越生る奇々本堂義仲  
巴山岐二女の宮左あり  
生残りたる深山也  
よめ西岸





に川宿なるを

多作時とては風をあらふ宿

汗は川も近きあり

田の水の川宿や雲の影

に川宿をいふ時連を人多く出はし

起る甚難流波一川に川宿集る

傳藩方へ

三日天氣費川宿出之申宿廿六宿お被

境麻宿を境麻峠お越下へ御宿宿申

食波一より和宿

餘田宿也つゝの

安郷とく成り候



西條や村山口金丸連の言を依る物歸と  
如し系葉漬出りては

神子よき山口もはし中ふり

あそふにぬめにもちりしは

東條屋村相誠和田宿永井在る倉之河

旅人の言ふ言ふはりの

子孫永井の葉子自り

曾天氣和田宿出之長久保宿若田宿相誠

望月宿の中倉波し又八幡宿陸宿

宿若村田宿十田井宿連合相誠書成宿

草屋清茂言の向り如序出りては

葛屋中河つてえん水か能成ハ



のしみほくね宿をさす

程宿ゆききい程宿のほり水

まき宿や宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

目

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿

宿ゆききい程宿ゆききい程宿



今野(出)神名川(弘)渡(一)お城新(所)宿  
山中(屋)控(一)ゆ(之)河(一)

以(也)と(ま)い(れ)ば(あ)り(程)の(思)ひ(成)

六百(天)守(新)所(宿)出(之)中(庄)原(谷)お(城)

徳(之)谷(宿)中(食)波(一)夫(下)崎(一)栗(お)城

楠(川)宿(栗)系(控)在(惠)一(方)一(河)

別(寝)と(一)客(と)記(と)不(蜀)帝(魂)

四月(七)日(天)氣(楠)川(出)之(上)尾(宿)お(城)大(宮)

宿(出)と(一)一(先)

賢(情)ハ(秋)毎(お)客(と)上(尾)宿

笑(と)と(あ)り(も)大(多)乃(宿)

浦(和)品(お)蔵(宿)全(戸)田(川)弘(渡)一(お)城



板橋名の中食波——愛夜江岸急流

戻り流し波——盤さ——みろ酒香も

七縁の春心ありとありし大船の

さ——みろ酒と春心ありとありし

流し波ありとありし大船の

春心ありとありし大船の

流し波ありとありし大船の

流し波ありとありし大船の

流し波ありとありし大船の

流し波ありとありし大船の

久松早良





△ 云 山 行 記

雲 山 行 記 卷 一 一

雲 山 行 記 卷 一 二

雲 山 行 記 卷 一 三

雲 山 行 記 卷 一 四

雲 山 行 記 卷 一 五



